

是も言葉巧にておかし、

〔嬉遊笑覽雜伎〕享保中の板にて、智惠較と云ものあり、四ツ目總どり碁と云あり、○中この外に四

ツ目總どり、三ツ星そうどりと云あり、いづれもいくたりにても、順にとりてまはすなり、又一人

にてとるは、ひろひ物とも、とりもの共云、其形升八ッはし矢万字等あり、寛保三年刻御伽雙紙と

云ものに、ひろひ物には中字井筒などさま／＼あり、いづれもごばんの筋を順にあともどりせ

ぬやうにとる也、碁石にてする戯、色々あり、

〔鹽尻七十一〕碁石鼻に入たるを治す

ある人戯れに碁石二ツ鼻の穴に入しが、何としても出ざりしに、紙よりをして一方の穴に入れ

れば、くさめ／＼して石出たりと也、

〔菅家文草詩二〕去冬過平右軍○右近衛少將正範池亭對乎園碁賭以隻圭新賦、將軍戰勝、博士先降、今寫一通、訓

一絶、奉謝遲晚之責、

先冬一負此冬訓、始使隻圭降、奕秋閑日若逢、相坐隱、池亭欲決古詩流、

〔江吏部集中人倫〕述懷古調詩一百韻

優遊何所詠、身上舊由緣、七歲初讀書、騎竹繫蒙泉、九歲始言詩、舉花戲霞阡、十三加元服、祖父在其筵、

提耳殷勤誡、努力可攻堅、我以稽古力、早備公卿員、汝有帝師體、必遇文王田、少年信此語、意氣獨超然、

下帷不窺園、閉戶不趨權、圍碁厭坐隱、投壺罷般還、○下

〔半陶彙三〕皓隱齋說

意雲老人庵居泉南、自號可竹、又以皓隱扁、寢從容謂余○僧彦龍曰、昔巴園人收大橘、剖之有二叟對碁、曰

橘中之樂不減商山、但恨不得深根固蒂爾、以水噴地、爲二白龍而去、故丹溪先生名橘爲皓隱、有以哉、

我非以角黃綺園而隱者、隱于橘也、非以橘而隱者、隱于碁也、有敵手知音、則引盤敲子、燈火夜落、谷鳥